

## 幕末明治の写真師列伝 第五十二回 内田九一 その十七

前回まで記載した他にも、内田九一が明治4年頃に撮影したといわれる徳川幕府御座船を中洲の御船蔵で撮影した「上総丸」、「国市丸」、「八幡丸」、「天地丸」、「延宝丸」、「小鷹丸」の写真があるが、『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社、大正14年）の巻末「写真史料展覧會出品目録」によれば、「上総丸」「国市丸」の写真は、「明治七年ごろ内田九一氏撮影せりといふ」と記載されている。

また、明治5年に北海道開拓判官岩村通俊はアイヌに農耕を奨励するため、アイヌの男女27名を選んで上京させ農業実習にあたらせた。この時、このアイヌの人々は、麻布にあった元下総佐倉藩主堀田正倫の上屋敷（開拓使東京第3号官園）で、家畜の飼育や牧草の試作などを行った。この時に撮影されたと思われる「アイヌの人々」、「(アイヌの男たちの集合写真)」、「(アイヌの女たちの集合写真)」の写真がある。これらの写真は後にウィーン万博に出品することを目的として太政官正院内に設けられた「澳国博覧會事務局」へ納められたものともいわれる。したがってこれらの写真も明治4年か5年に撮影された写真であろう。下総佐倉藩は佐倉順天堂があり、松本良順、佐藤泰然とも繋がり深い藩である。こういったこともこのアイヌの人々が内田九一の写真館で撮影されたことに何か関係があったかもしれない。

『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社、大正14年）に掲載されている「内田九一氏と東京隅田川の舟遊」（平田健一氏所蔵）の写真は、明治7年頃の撮影、舟中欄干のもたれている人物は内田九一であると云われている。その他にも近年、「佐治自謙」（明治4年撮影 内田九一写真館、堀田正久氏蔵）佐治自謙は元佐倉藩士・年寄（家老、城代に次ぐ地位）禄高五百石の写真が見つかっている。

また、内田九一が明治4年7月24日に浅草大代地の写真館で撮影した写真で、酒井忠篤公と13人の家来と共に写された集合写真がある。この写真には後列左から、服部俊太郎、浅賀彦右衛門、三宅七郎高興、中村文次郎、中村嘉四郎、内藤叔三郎、高坂太郎、前列左から加藤甚平、水野彌太郎、今泉源一郎、加藤宅馬、酒井忠篤公、鱸角兵衛、澤井壯彌の人々が写っている。以上のことから内田九一が明治2年から明治5年当時、横山松三郎や清水東谷と共に「写真は三氏あり」（『高名三幅対』明治5年版）、東都第一と謳われて、相当な評判な写真師だったことがよく判るであろう。

『写真の今昔』（松本福太郎（碧校）、日本写真興業通信社版、昭和10年）の「写真界今昔座談會」では、山本讃七郎氏（注1）が、山本「その時分に東京で名高い写真屋といふと、東谷先生、内田九一さんが浅草でやって居りました」（中略）山本「一番古いのでは、私は東京に参ったのは明治四年頃でございますが、その頃はよく分りませんが、内田九一さんが盛んで次に清水東谷さんなどがやって居りました」市岡多次郎氏（注2）が、市岡「内田君は写真ばかりでなく、レンズを輸入して自分のレ

ンズだと云うので売って居た」

山本「明治四年頃には一番盛んでした」と述べている。

内田九一がどういう風に撮影していたのかを伝える談話がある。それは内田と同時代の写真師、中島待乳が自己の経歴を語った『明治洋画史料 懐想篇』（青木茂編、中央公論美術出版、1985.9）にある「中島待乳氏の経歴談」の以下の記述である。

「(前略) さうこうする内に、一年は夢の間に過ぎ去りました故、一先づ写真屋を独立で始め様と思つて、浅草の友人の家を借りて見世を開き、傍ら研究することゝしました、これが丁度明治五年のことです、其内に内田九一と云ふ人が茅町で写真屋を始めました、当時中々流行つたものです、けれど此人のやり方は、写せば写しつばなしで修正と云ふことをやりません、(中略) 又当時の光線の取り方は滅茶苦茶で、内田などは平光線でした、けれど私が考へた処では、どうも平光線だと人の顔が平たく見える傾があるので、之を避けるために、片光線と云ふ撮り方をやりました、即顔の半面によく照して、半面を蔭にするのです、これは当時自分一人の専売ものでした、(中略) 然し市民一般には内田の平光線の方が歓迎されて、私のやり方は半黒だと云つて、きらわれたものです、(中略) 御客に渡す写真の枚数も、内田では四枚一組一円といふことでした」

「内田はとうとう四ッ切の器械を買い込み、鏡玉は景色用の「ラピッド」を付けまして、其れで方々の景色写真を撮して居りましたが何分当時は生取りの頃ですから、器械一切の外に丁度、網籠の様な暗室を人夫四人で交替にかつがせて押し出すと云ふ騒ぎです、これでも松島や日光迄も出掛けて来ました、其内に人像用の鏡玉も取りよせました、私も何分良い鏡玉を持ちません故、内田へ参りまして何か一つ譲ってくれとたのみました処が、「スタインハイル」なれば譲ってもよいと云ふのです、自分は喜んで夫を譲り受けることゝなりました、値段は七十五円、内田が外国から取りよせた実際の価格ださうですから当時七十五円と云つては中々大したものでした」

(注1) 山本讃七郎

安政2年7月生。岡山縣後月郡梶口村の人後中島待乳の門に入り、明治15年芝日蔭町に開業、其後鹿島清兵衛の玄鹿館の主任技師後北京に渡り開業、北清事変に萬難を排して撮影し勇名を謳はる。甥山本素外に業を譲って帰京し、幻燈會の開催、後進の指導等にあたつた。

(注2) 市岡多次郎

明治3年岐阜縣生。東大化学部卒、海軍兵学校教官、海軍技師、呉海軍兵廠監督官として英国に留学、海軍大学教授を経、退官後写真工業研究のため欧米を見学した。日本乾板株式会社製造課長を経て、大正13年オリエンタル写真工業株式会社に入社し、研究部長及学校教育に盡瘁した。昭和16年2月28日逝去、享年72。

梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より

(森重和雄)